

# やまと 民俗への招待

鹿谷 熟

昨年12月25日の朝、香芝市役所へ向かう途中、鹿島神社に参拝する。10人ほどの男の人たちが拝殿の注連縄の掛け替えをしていた。お話を聞くと結鎮座と呼ぶ富座の十人衆が毎年この日に行うのだという。

1月26日には結鎮祭といふ行事がある。今年の当日朝、頭屋の片山義一さん宅に寄せていただきた。神社の東方、日切地蔵堂の頭屋の玄関には「鹿島神社御神靈御旅所」の札が立ててある。お邪魔すると十人衆の着替えの最中だった。一老は茶色、他の人は紺色の素襪帽で、丸い四つ目の紋が付いてい

る。床の間には祭壇が設けられ、「鹿島大御神祭神武靈雷命」などの軸を掲げ、餅米一升で蒸し飯を作り、一つは四角くし、その上に円錐形にしたもの重ねたものなどが供えられている。

これらの神饌を一式神饌櫃に納めて、午前10時ごろ神社へ出発した。四老が「渡御」の轍を持つて先頭に立ち、「一老(笏)、二老(御祓、頭屋)、三老(御幣)、五老(御神酒)、六老(大鏡餅)、七老・八老(警護)、九老・十老(神饌櫃)」の順で、踏切を越えて神社に向かう。

10分ほどで到着する。供え物を供えて降神の儀を行ひ、再び行列を整え、拝殿に上がって、おと、頭屋に戻ってくる。こ



渡御の幟を先頭に鹿島神社に向かう  
結鎮座の十人衆=筆者提供

## 鎌倉時代からの宮座

朝に仕えた鎌田兵衛藤原政清とその子政光が、義朝死後に源氏再興を祈つて鹿島明神に百日参籠して、鹿島明神に百日参籠し、「汝の福、西にあり」と夢告を得て、西國の大和下田村にたどり着き、ここに鹿島明神を勧請したという由緒が読み上げられる。午前11時すぎに祭典が終わると直会が行われ、夕方には大字下田と五ヶ所の70戸あまりの住民の家に、手分けをして鏡餅が配られる。

鹿島の神を頭屋に迎えて一老を祭主として祭典が執り行われる。三老が進行役をして修祓・献饌・祭文奏上・玉串奉奠と進められるが、祭文奏上では一老が奉送文・祝詞・祭文を読み上げる。最後の祭文では、源義朝に仕えた鎌田兵衛藤原政清とその子政光が、義朝死後に源氏再興を祈つて鹿島明神に百日参籠して、鹿島明神に百日参籠し、「汝の福、西にあり」と夢告を得て、西国の大和下田村にたどり着く富座が、現在もこうして首み続けられている。鎌倉時代以降の歴史を有する富座が、現在もこうして首み続けられていることは全国的に珍しい。幾多の変遷を乗り切る努力が続けられてきたにちがいない。

表

(奈良民俗文化研究所代